

biologique de Roscoff de l'Université de Paris, including, if possible, an excursion for fresh-water algae in inner Brittany and a visit to a Manufacture for production of Iodine and Algine from Algae.

- 2) Fresh-water: To subalpine Lakes around Aix-les-Bains and the Laboratoire d'Hydrobiologie de l'Ecole National de Eaux et Forêts du Lac du Bourget.

All matters concerning the Section of Phycology and Phycological Excursions must be addressed to the Secretaries of the Section:

Prof. J. FELDMANN
(Marine Algae)

Dr. P. BOURRELLY
(Fresh-water algae)

Institute Océanographique

195 rue St Jacques
Paris 5 éme

文 献 抄 録

BATTERS 著

「穿孔藻類の新屬コンコセリスに就いて」

BATTERS, EDWARD ARTHUR LIONEL: On *Conchocelis*, a New Genus of Perforating Algae. in G. Murray's Phycological Memoirs. 1892. Pt. 1. pp. 25-28, pl. VIII. London.

之迄も邦産のコンコセリスに就いては幾つかの報告がなされているが本誌に於ても須藤博士が「アサクサノリの養殖を安定させるために」(藻類 第1卷 第1號)の論文の中にコンコセリスに関して興味深く述べられて居るし、又中村博士も「海苔の生涯」(藻類 第1卷 第2號)という題で Nature 所載の DREW 女史の論文「*Porphyra umbilicalis* (L.) KÜTZ. の生活史に於けるコンコセリス期」に就いて詳しく紹介されている。

DREW 女史は *Porphyra umbilicalis* (L.) KÜTZ. の果胞子が發芽して出来る糸状体は BATTERS が 1892 年に貝殻に穿孔する藻類の新屬新種であるとして *Conchocelis rosea* と命名發表したものと外見上同一のものであると述べられているのである。

そこで筆者は BATTERS によるコンコセリスの原記載を検討してみたいと思つたのであるが同時に原記載は此の際は是非知つて置かれなければならないことであると思つたのでここにこの BATTERS の論文を紹介したいと思つた次第である。又諸所の研

究機関からしばしばこの論文の借覽の希望に接しているが本學では貴重文献の貸出しをお断わりして居り、又此の小論文閱覽の爲めにわざわざ本學まで來られるわずらわしさを省く一助ともなればと思ひ敢て茲に雅拙ながら抄録したことを諒承願いたい。

譯 文

穿孔する藻類として BORNET, FLAHAULT 兩氏は「軟体動物の固い貝殻の中に生活している數種の植物について」* の報告中に此の奇妙な状態で見出されるであろう所の 8 屬の藻類を擧げており、それ等はすべて藍藻か綠藻で色は藍色か深綠色或は草色を呈している。私は英國の Clyde 海の Cumbrae 島附近で採集した貝殻の中に他の幾つかの穿孔藻類に混じつて、明らかに *Porphyraceae* に屬する鮮明な臙脂色の或る糸狀の藻類を發見して非常に驚愕した。穿孔藻類に最も造詣の深い BORNET に此の標本を送つて彼が今迄の研究中にこれと同じものを見たことがあるかどうかを尋ねた。BORNET は早速返事を呉れて、彼は之迄に私の植物に似たものを見たことはないが *Erythrotrichia* に類縁の種と考える旨を回答して來た。私は此の報文で我が海藻群(相)に此の興味ある新種を加えることに就いて短い説明を致さんとするものである。

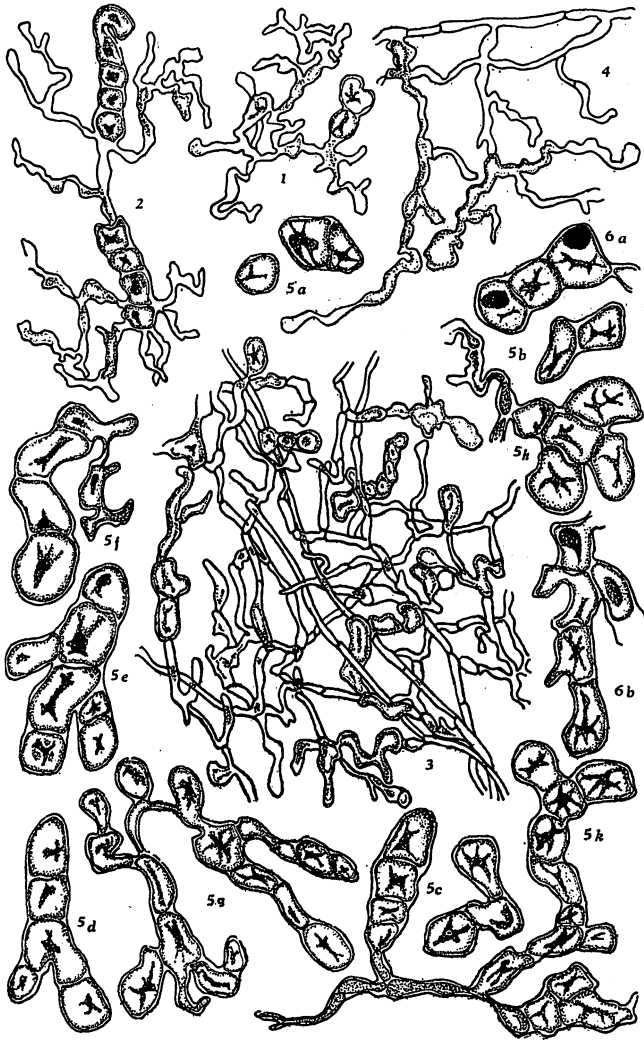
この藻類が初めて得られた貝殻は大小 Cumbrae 島の沖水深 6~8 尋の所をドレッジされたものである。最もよい標本は *Mya truncata*** と *Solen vagina**** の貝殻の中に穿孔していた。所が私は其の後に干潮時砂濱に打上げられている貝殻の中にも、貧弱ではあるがこの藻類を見つけた。

この藻類の存在は肉眼には貝殻の内側の表面にあるピンク色の斑點として認められる。この斑點は擦つても落ちない。又コンコセリスが穿孔している貝殻から半透明になる程の薄い破片をかきとることが出來ればルーペでもこの藻類の繊細な放射糸狀体を容易に認めることが出来る。

この植物の特徴はそれが生育している石灰物質の中からとり出されなければ充分には分らない。そこで私は BORNET と FLAHAULT が處方した Pérényi の溶液**** が他のどんな脱カルシウム劑よりも作用は緩慢であるけれども最も良好な結果が得られることに氣付いた。

此の藻類は最初は圓形の斑點に見えるがそれはしまいに幾つか合流するようになる。此の斑點のピンク色がこの藻類と常に或はしばしば混在している他のどんな穿孔藻類の斑點からもはつきり區別出来る。

Pérényi の溶液を用いて貝殻からこの藻類をとり出すとピンク色の斑點は交錯した分岐糸狀体が網状をなしているものであることが直ぐに分る。斑點の中心部では密にフェルト状をなしているので分岐の状態がよく分らないが、然し縁邊ではそれ程交錯していないので 1本 1本について相當の長さまで辿ることが容易である。この藻類の体は關節する分岐糸條から成り、若い植物の体(圖 1, 2) ではその糸條が中心から輻



Conchoecelis rosea Batt.

Pérényi の溶液で脱灰した標本から作った

圖 1, 2 この藻類が極く僅かに感染している貝殻の1部から得た若い植物体 (× 170) 圖 3 更に進んだ時期に於ける水平な部分 (× 170)
 圖 4 垂直な糸條の部分 (× 170) 圖 5 膨脹部の發育の種々の状態色素体を示している 圖 6 胞子を有している膨脹部の部分。(原圖複寫)

射状に擴つて居る。それから次第に幾つかの斑點が合流するようになり更に交錯して、緻密な連続する水平な網となつて、終には貝殻の表層の内部のかなりの部分を覆つてしまうことになる。

此等の糸條は太さが頗ぶるまちまちで、私の測つた一番細いのは徑僅かに 1.5μ 、最も太いもので徑 7.5μ あり、普通は徑約 4μ である。又水平な糸條をなす細胞は形が非常に種々で眞直ぐであつたり曲つていたり、棍棒状又は三角形、或は記述しにくい程不規則形なをしている。水平な糸條体層の下の所々から糸條がふくれ出て仕切のある單條又は僅かに分岐する所の不規則な膨脹部を形成している(圖5)。この膨脹部は普通の糸條よりは勿論太く、徑はしばしば $20\sim 30\mu$ もあり、長さは 70 から 110μ 以上に達することも稀にある。通常の糸條部の分岐方法は極めて不規則で相當の長さ迄單條でありながら急に、側出芽のひこばえ(發出)によつて密な分岐体と成る。側枝は對生であつたり互生であつたりで、そのまま單條のこともあるが、又、よりしばしば複分岐しその側枝は時に網目状をなすこともある。糸條部の細胞と膨脹部の細胞は普通には結合部で、程度の差はあるが縊れている。

膨脹部は $2\sim 10$ の細胞からなつていて、長さは 15μ から 30μ あり、全く單條であつたり、多かれ少なかれ分岐している。膨脹部の各細胞の中心には1箇の星形の色素体が存在しその星形の足はしばしば細胞の縁邊に迄達している。私は色素が普通の糸條中に配置されている様子を確實には見届けることが出来なかつた。然しそれは圓筒の壁に連続する層をなして貼り附けられているように見える。その圓筒の壁は、私の觀察した限りではいつでも均等な或は殆んど均等な藍紫色を呈している。膨脹部は水平糸條部からしばしば分離する、その時に膨脹部は獨立に存在することが出来る。私は色々の大きさや形の膨脹部がそれ等の由來した水平な糸條部の痕跡さえも止めずに *Gomontia* や他の穿孔藻類と一緒になつていられるのをしばしば見ている。

此植物は膨脹部の細胞の中に1細胞に1箇ずつ形成される胞子によつて繁殖が行われると思われる。私はその細胞から胞子がぬけ出るらしいところの球状体をみている。而して、時々それ等が遊離して他の穿孔藻類の糸條の間に混じつているのが見える。

色素体の形と色素体の色及び胞子形成の方法によつて *Erithrotrichia* とこの屬との間には強いつながりのあることが指摘される。然し分岐体であることと特異な膨脹部をもつていふことが兩屬をはつきり分離する。或る觀點に於て例えば膨脹部と分岐方法の點でコンコセリスと *Osterobium* とは似ているがそのピンク色と關節糸状体によつて直ぐさま區別される。

尙本文には新屬としてのコンコセリスの性質をラテン文により簡単に記載し、且つこの糸状体に *Conchocelis rosea* なる種名を興えて同じくラテン文による簡単な記述

がなされているが省略した。

註 * BORNET, ED. and FLAHAULT, CH: Sur Quelques Plantes vivant dans le Test Calcaire des Mollusques. Bull. Soc. Bot. Fr. 1889. XXXVI. pp. 1-31, Pl. VI-XII.

** エゾオウノガイ

*** マテの 1 種

***** Pérenyi の溶液の處方は 10% 硝酸 4 容量, アルコール 3 容量, 0.5% クロム酸 3 容量である。色は Blue violet を呈する。

(三浦昭雄—東京水産大學植物學教室)

學 會 錄 事

日本藻類學會第一回總會議事報告

日 時: 昭和 28 年 10 月 11 日, 午後 6 時より 10 時。

場 所: 金澤大學學生會館。

出席者: 33 名。

開會に當り、會長山田幸男氏の挨拶があり、中村義輝幹事が進行係となり、夕食を共にし乍ら、阪井與志雄幹事から庶務・會計の中間報告が行われた。後、廣瀬弘幸氏が總會議長となり議事に入り、中村幹事から提案理由の示された會則の變更を踏り、本號の表紙裏に掲載された會則が承認された。又、無記名投票による會長の選舉の結果山田幸男前會長が再選され、新役員は後に會長の指名による事で一任された。更に、會長より、石川光春 國枝博 牧野富太郎 三宅職一 中野治房 田原正人 山内繁雄の 7 氏を本會名譽會員に推薦致し度しとの提議があり、満場一致で之を可決した。次いで懇親會に移り、自己紹介等が和氣藹々裡に行われ、第一回總會を終つた。その他の議事及び報告等は下記の如し

1. 會 則。本號表紙裏に掲載のものを見られたい。
2. 會 誌。本會の財政面から會誌に廣告欄を設けよ、との聲があつたが、今後考へる事になつた。又連載講座様のものを掲載しては如何との聲があり、多數の賛成者があつた。
3. 會 員。會員數が少ない故會誌を店頭に出し、又他の雜誌に本誌の存在を強調しては如何との聲あり、之には會員總てが新會員の獲得をすべきであるとの申し合せに一致した。
4. 役 員。後日、會長より指名されるが、各地に世話係を依頼し、會員からの質疑に應答し、其の他、入會、會費の一括送付等の斡旋をする様にしたいとの提案があり、之を實施する事にした。